

## 地域情報（県別）

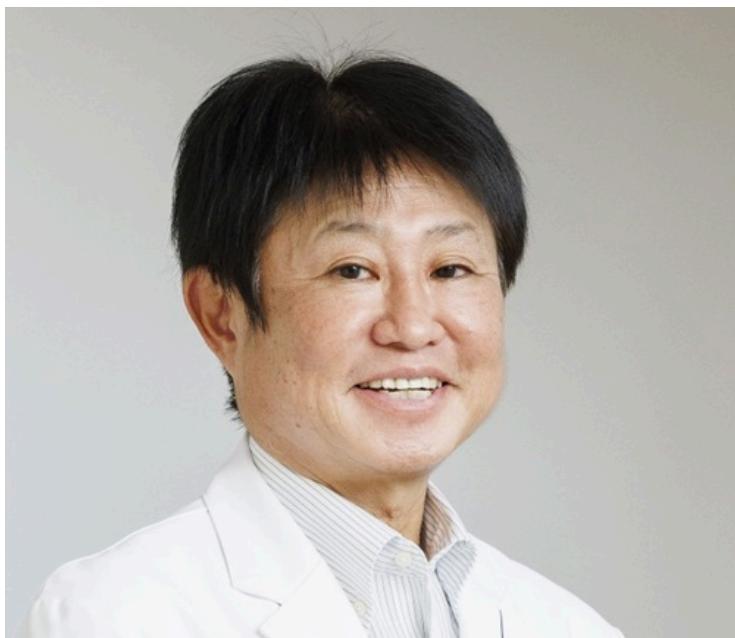
### 【東京】「先端機器より医師の腕が強み」精銳が難症例支える-森俊一・医療法人社団博豊会理事長に聞く◆Vol.1

都外の患者も増え、「博豊会東京脊椎病院」から「博豊会脊椎病院」に名称変更

2025年12月10日(水)配信 m3.com地域版

都内でも少ない脊椎外科の専門病院が東京都足立区にある。2023年に開院した「博豊会脊椎病院」は、脊椎疾患専用の78床と先端機器を備え、多職種約110人で患者を支える。治療を受けた患者の口コミで、現在は首都圏広域のほか東北から来院する人も。「難症例への対応に注力し、従来の脊椎外科とは一線を画す病院に成長したい」と語る森俊一理事長に現状を聞いた。（2025年10月29日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら（近日公開）



森俊一氏（法人提供）

——博豊会脊椎病院が開院して2年が経ちます。まずは、現在の人員体制をお聞かせください。

当院は多職種のスタッフから成り立ち、現在は約110人が在籍しています。常勤医は脊椎脊髄外科医が5人、麻酔科医が2人の計7人です。多職種の内訳は事務や看護師のほか、薬剤師、診療放射線技師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士、臨床工学技士、管理栄養士、看護補助がいます。このうちリハビリに携わっている理学療法士は11人、作業療法士は2人です。

——病院のホームページによると、患者は東京都外からも来院しているといいます。それが、2025年11月1日に「博豊会東京脊椎病院」から「博豊会脊椎病院」に名称変更する理由にもなったそうですね。

患者さんは広く各地から来院しています。当院は足立区に立地するので東京北部を中心に、埼玉県や千葉県のほか、近くに常磐自動車道に接続する三郷ジャンクションや東北自動車道に続く川口ジャンクションがあるため、車で茨城県や東北地方からも来られます。これから手術を予定している入院中の患者さんは、中部地方の岐阜県にお住まいです。

患者さんが当院を知るきっかけは複数ありますが、広域から来院される理由としては口コミの影響が大きいと思います。手術を受けた患者さんから感想や評価を聞いたご家族や親族、友人・知人の方からご相談を受けるので、良い意味で患者さん同士のネットワークが築かれている印象です。

「ADLや生命予後に関わる症例に注力したい」

——同院では設備として、手術中に透視画像やCT画像を撮影できる先端機器「O-arm（オーアーム）」や「ナビゲーション」を保有しています。

O-armを活用することで病変を3次元で確認しながら手術を進められるうえ、この機器は撮影した画像にインプラントの設置位置を投影させられます。このナビゲーションシステムにより、手術部位の変形が強かつたり多くのインプラントを入れたりする場合でも精密な手術を行いやすくなります。

O-armは設備面の特徴の一つですが、それよりも当院が強みとするのは、機器に依存しなくても相応の結果を出せる医師がいることです。ナビゲーションシステムは有用ではあるものの、誤差が生じることがあるため、そんな時にどれだけ微細な感覚を手に感じ取ることができるか。最終的には、医師の経験・技術・センスが問われます。

——脊椎外科の専門施設は都内でも少ないため、難症例の患者が集まる傾向があるのでしょうか。

そうですね。当院が特に注力しているのが、難易度の高い手術です。脊椎外科領域でポピュラーなヘルニアの手術などは行っている施設が増えてきたため、当院としてはより当院でしかできないこと、つまり、ADLや生命予後に関連するような症例への対応に力を注いでいきたいと考えています。

例えば、脊柱変形をはじめ、すべり症や分離症、靭帯骨化症などさまざまな脊椎病変は、精神疾患や寿命とも相関関係があると考えられています。超高齢社会に伴い、該当する患者さんがとても増えています。今までの脊椎外科では一般にも知られているヘルニアや脊柱管狭窄症などの病気に対し、傷口をいかに小さくして早く治すかに注力してきました。しかし、時代が変化する今、当院としては「高度な専門施設として求められることは何か」を重視しています。

## 「ライフスタイルに合わせた術式選択を」

——手術の面では、患者の負担が少ない「XLIF（エックスリフ）」「OLIF（オーリフ）」という方法を行っているといいます。

XLIFは、当法人が2013年から運営する「八王子脊椎外科クリニック」の頃から継続して行っています。側腹部から腹膜外路を経由して椎間板にアプローチする方法で、後方法に比べて硬膜外静脈叢の処置をする必要がないことや間接除圧ができる、ケージの設置によりある程度の矯正が簡便にできることから低侵襲な術式だと言われています。

手術においてはXLIF、OLIFのような低侵襲と安全性の高さを重視つつ、「質と結果」を追求しています。患者さんの年齢や仕事、子育て中かどうかなどのライフステージを考えてゴールを設定し、それをかなえるために望ましい方法を採用しています。もし、患者さんが腰に痛みを抱えているだけでなく、背骨が曲がっていて歩きにくい状況であれば、痛みの軽減だけでなく歩きにくさの改善も図っていく、といったことです。

背骨は神経の入れ物であると同時に、運動器としての役割を担っています。痛みを取ることはもちろん、患者さんの個々の状態と生活背景、将来展望も見据えた専門医療を提供したいと考えています。

### ◆森 俊一（もり・しゅんいち）氏

1993年愛媛大学医学部卒。帝京大学医学部附属溝口病院や鎌ヶ谷総合病院脳神経外科脊椎センター長などを経て、2013年に八王子脊椎外科クリニックを開院。現在は2023年に開設した博豊会脊椎病院の院長を務める。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】



